

日吉丸雅櫻 三の切

二二一

〔解題〕 享和元年十月四日から北堀江市の側の芝居(座本豊竹時太夫)で興行。作者は近松やなぎ・近松加造・近松萬壽・近松梅枝軒である。

數ある太閤記種の一つで、日吉丸の出生より桶狭間の合戦に至る迄の間の事を材とし、殊に木下藤吉が堀尾茂助の案内で間道から進んで齋藤龍興の居城である稻葉山の城を陥れた事、清正が鐵治屋の慄であつたが母の縁で秀吉の許に人と成つて武名を顯す事を主題として脚色したもので、番附及び正本表紙見返しに示した場割りは次の通りである。(發端)竹生島(此間三年たつ)今川館、日吉丸誕生、千僧供養、春是出陣(此間十三年たつ)
〔初段〕壺割、土橋、茶碗屋(此間十六年たつ)
〔二段目〕八幡、松下屋敷兵法、東吉部屋
〔三段目〕蘆原、鹿狩、割普請、大手口、花壇
〔四段目〕道行洲股、陣屋、熱田の社、つゝじが嶽
〔五段目〕桶狭間の段から成る。その中では初段の切、三段の切、四段の切などが名高く、殊にこゝに収めた三段の切が山である。

茶碗屋源左衛門の義子源太郎は小田春長の駒木山城を預る木下藤吉に召抱へられて堀尾吉晴と名のつて侍とな

つたので、その妻のお政は父の銀治屋五郎助や母や弟の竹松と共に尋ねて来て、城の大手口で吉晴に出逢ふ。この時五郎助は故主齋藤明舜の女萬代姫が春長に嫁したが此の駒木山城に押籠同然で暮して居たのに春長は今宵藤吉に命じて首を討たせるといふ事を立証きして、奪ひ出さうとして、城内の花壇の邊迄忍び寄つた處を吉晴に捕へられ、こゝで始めて城主藤吉に對面して、昔色々と世話をした猿之助であつたのを知つて奇遇に驚き、又茶碗屋源左衛門を殺した事も述懐するので吉晴は始めて男五郎助が義理ある親の敵と知つて驚く。五郎助は藤吉に折入つて頼み度い事があるといつて連立つて奥へ行く、こゝ迄が三段目の花壇の段の口で、これから、こゝに收めた切になるのである。俗にこの段を「五郎助住家」といふが、それはこの一段のみを切放して呼んだ誤りで、丸本によつて見れば、舞臺は駒木山城中である事は明かである。

「こそは入りにける。地散る花の。別て。お休みなされ遊ばしたら。自らは叶はぬ縁と縮めよと。地立上る裾引きれを暫し慰むる。程とや春の名残とは。然るべう。地存じますると感動に。武とどめ。マア〜待つて下さんせ。地知らぬお政が千鳥足。調オ、こちの人家の三つの指手はもち〜。ア、フ辛シ最前からあらましは。襖の陰にて聞爰に居やすんすか。春の夜寒に酒一氣やと寄添へば。地吉晴は取つて突退きました。地とは言ひながら情ない。つたべ過ぎて。オ、暑やのホヽヽヽけ。調女房去つた縁切つたぞ。エ、語長地過ぎし逢ふ夜の跡言を。身に沁々私とした事が滅相な。今までの源次郎るに及ばぬそちが素性。五郎助殿が手と片時も。タ、キカリ思ひ忘るゝ隙もな様とは違ふ。久吉様の御家來。堀尾茂にかけられし。茶碗屋の主源左衛門は。う。年月隔つ其内に。移り易きは殿御助吉晴様。侍の女房が。こちの人どう我が爲には義理ある親。殊には隔つ敵の心。若しや見捨てはなされぬかと。さしやんせとは言はれない。今から行味方知らぬ内は兎も角も。知つては片ほんにあらゆる神様や。佛様まで無理儀改めて。わが夫にはお居間へござつ時も添ふ事ならず。暇の印はこの一腰。いうて。案じ暮した甲斐もなう。添は

れぬ義理の離別とは。あんまりむごいも。エチ手負ひに取付き勞はれば。コレ五郎助殿。氣が違ったかソリヤ何と取付いて。フシ涙先立つ口説き言。お政は苦しき顔を上げ。調母様堆へてぞ。娘のお政が此様にコレ。自害して地色に惹かる、吉晴も。きつと心を取直し。調悔んで返らぬ互の縁。重ねて思ふ夫に見放され。冥途の道をうろを果す徒ら女郎。勘當ぢや。親子でないふな。聞く耳持たぬぞ。スリヤどのくと。嘸や迷ふでござりませう。親いぞ。エ、それはあんまり胸懲な。地様に申しても。ホ、尋ねに及ばぬ。養に先立つ不孝の罪。赦してたべと手を可愛娘が命の際。勘當とは何事ぞ。心父の慈は汝が親。縁につながる茂助に合はし。フシ卿ち歎くぞ道理なり。地始強やとふし沈めば。五郎助は聲あらゝあらず。武士の詞に二言はない。終聞き居る五郎助は。手負ひの方へげ。調天地の間に生ある物。子を憐れ言放したる理の當然。ハア。はつとおフシ見向きもせず。詞それ。齋藤龍興まぬ物があらうか。まして人間。不便政が突詰めし。女心の一筋に。エ詮が立籠つたる。稻田山の城廻は。凡そになうて何とせう。可愛さ餘つて縁を方涙なくとも。斯くと覺悟は夫の魂。東國第一の名城。一夫是を守らば萬卒切り。翠に知らせし稻田山の間道イヤ抜く手も見せず我と我が咽にがはと突破り難き堅固の要害。この城を落すにサ我が子の勘當。堀尾茂助吉晴殿。築立つれば。驚く茂助母親も襖あらはには。瑞龍山の峯傳ひ。西に聞ゆる瀧のと承知あられしかと。地それと知ら轉び出で。ナウ何故の自害ぞや。早ま音を。心の當途に谷へ下り。水に従ひする五郎助が。恩義を範めし一言に。つた事しやつたなら。調コレ〜五郎出づる時は。拗手の水門口。敵の油断フシ胸の底意を現はせり。地一間の内助殿。娘が自害しましたと。地明くるはこ、一つと。地翠の堀尾に餘所ながより聲高く。調ヤア〜、齋藤明舜が障子の打窓ぎ。竹松膝に抱きかゝへ。ら。知らず間道聞取る吉晴。敵を攻討家臣。加藤忠左衛門清忠殿。木下藤吉我が子の最期に目もやらず。煙草すばつ味方の英氣。フシ聞く武運と心の改めて。對面せんと。地明智の一聲鶴

然と歩み出で。五郎助に打向ひ。詞を先立てゝ便りなき身のその上に。こゝも我が子に後れては。思ひの火を胸に焚く。肉親の娘が恩愛に惹かれ。又二つには。齋藤の傾く運の未然を察し。稻田山の間道を教へたる身の誤りと。古主への言譯に。命を捨つるは天晴れ死なつしやる。坊も殺して下されと。目もいぢらし。何思ひけん五郎助。

ホ、推量の如く。齋藤の恩縁を稚心の孝行心。聞く五郎助は顔眺め。は娘の首を討落せば。是はとばかり驚

喰ひ込んだる此五郎助。ガ一命を捨て

死なつしやる。坊も殺して下されと。目もいぢらし。

何思ひけん五郎助

ア吉晴殿。勘當すればこの五郎助とは。血迷はれしか五郎助殿。とても助から

づれし音聲にて。久吉疾くより承知致

赤の他人のその女。誰に憚る事やあらぬ女なれども。首を討たれし所存はい

した。ア御心勞の程察し入る。地と大地ん。女房に持つて下さるか。ホ、ウ勘

かに。ホ、ウ賤しき銀治の職人とは成

を見抜く木下が。詞に五郎助張詰めし。當ありし其上は。最早縁なきこのお政。り果つれど。元は齋藤明舜が家臣。加

心弛んで思はずも。苦しき息をほつと未來永々一つ蓮半座を分けて相待つ

藤忠左衛門清忠。血迷ひしとは何の戯

突き。阿天晴れ明智の久吉殿。古主のべし。エ、忝い。あれ聞いたか娘。で

言。サア木下藤吉殿。齋藤の息女萬代

無道を見限りし。拙者が覺悟御覽あれはないコリヤ餘所の女中。アイ其お詞

姫が首。心を定めて質檢あれと。我

と地肌おし脱げば血汐の腹帶。朱に染が智識の引導。

地先立つ此身の經陀羅が子の首を引寄せて。差出す老の岩乘

めなす。シからくれなる。見るに驚

ニ。さは言ひながら勿體ない。親の御

づくり。久吉ハアと感じ入り。ホ、ウ

手負ひより妻はあるにもあられぬ思

恩を謝程も。送らぬ娘に命を捨て。お

ひ。ナウ情ない五郎助殿。可愛我が子情お慈悲の御勘當。あんまり冥加恐し

背あるべきか。春長公より仰せを受けし萬代姫の首。木下藤吉受取つたり。さりながら。義理は今生一旦にて。と名残を惜しまれよと。情の詞に五郎助は。子故に迷ふ輪廻の縁。こらへし悲しさを保ち兼ねて大聲上を抱きしめ。詞オ、娘よく死んだ。出かした／＼な。コリヤ徒ら故に命を果す不孝者ぢやと思ふなよ。齋藤の息女。萬代姫様の御身代りに立つて死んだは。古主へ對して大忠臣。カリ親は不忠に無懲の最期子はまた忠義に命を果す異報者孝行者。極樂淨土の東門を。忠臣貞女に命を捨てた。手柄者ぢやと名乗つて通れ。息ある内に得心させ殺したいはやま／＼なれ

白髪。何をどうして斯うしてと楽しんと改名し。家名を永く残さんと。地居やつたもの。こんな悲しい身になにせまい。茂助殿と夫婦にしたさ。ちつて髪も形も入るものか。可愛の娘と重縁一家。親子は一世その首に。娘の様にあらうと思ふ。健氣に死んだこの娘。賞めてやつて下され翟殿。見苦堪へ兼ねたる吉晴が心を察し久吉も絞り。娘をば。首打落す親の氣はコリヤ。ど諸共に。聲を限りに泣きつくす恩愛別に。血の涙。胸に磐石打たるゝ思ひ。秋の雨車軸四人が涙谷川へ落込む。娘の娘。眞思ひ出して折々は。香花の供水の逆落し。フシ山も。崩るゝ如くなも。蓑頼みます。こなたが手向の一滴は娘り。堀尾茂助は涙を拂ひ。恐れ入が爲の善智譲。百億萬の御首題を。唱つたる五郎助殿。忠義の最期遂げられふるよりも百倍倍。嬉しう成佛するわしは。茂助が養父へ義理も立つ。跡いのと。死ぬる今はの際までも子に惹に残りし御内室。御子息諸共吉晴が。知らず。脅に尋ねて逢うた時母様わし詞。堀久吉手負ひに打向ひ。由緒正かさるゝ恩愛の母も思ひに正體なく。身に引受けて養育せん。心置きなく成る。同氏も系図も揃うたる武士の胤とは露佛あれと。堀縁に引かるゝフシ堀尾が

愛の詞に悦ぶ手負ひ。虎之助はにこ

調稻田山の間道を聞取つたることそ究竟、清来れと勵ます木下。はつと勇みの聲

く頬。

調アノ殿様の家來になれば。一。イデ搦手より攻入つて。只一戦に高く。調是から好きの軍ごと。稚な遊

今からおれは好きの侍。軍に行つたらかけ崩さん。御用意あれとせき立つ吉

びの戦場にて。地敵の首は面はじき。大將の首。幾つもく切つて見せう。晴。ア、イヤく。稻田の城壁は袋の舊滑刀の續かんだけ切立て。切立て切

父様見て居て下されと。地聞くも涙の内。の鼠同然。久吉が手裏にあり。先づりまくり。六十餘州はお手車。でんく

深見草。花壇の蔭に最前より。忍び込さす敵は今川義元。討取る術ぞ肝要な太鼓攻め鼓。見ぬ唐土の名に高き。千

んだる永井早太。物の具堅め踊り出で。らん。ハ、ハ、ハ、げに尤も仰せの如く。里が竹馬一またげ。手綱。かい繩り差

調ノリ稻田山の間道を告げ知らしたる銀治屋五郎助。味方の陣へ注進と。地駆勢にて。勝利を得る術ぞいかに。ホ、口には涙の別れ路や。見送る父は斷末

出す早太吉晴が。立切る切戸虎之助。

ホ、それにこそ計策あり。この桶狭魔。なう是今が別れかと留むる甲斐も

調久吉様へ奉公始め。目に物見せんと間の戦ひは主人小田家の一世の職業。

無常の風。フシつひにあへなく散りて立上り。地フシ飛んで降り立ち庭先の丹下中嶋善解寺。地驚津丸根を始めと行く。地涙なくく妻と子が。手向くる

苔むす石に手をかけて。目より高く差して。七箇所に砦を築き變に感じ機に法のタ、キカ、リ導きは。妙法蓮華の露の上ぐる。希代の小兒が金剛力。打付け乗じ。見よく今に義元が。首振ぐる玉。照らすは月の限本に。正清宮と仰

られて早太が最期。フシ微塵になつては瞬く中コレく氣遣ひ無用とフシ軍がれし。神の双葉を櫻木に傳へて。今死してけり。地堀尾茂助つつ立ち上り。師が金言。地イザ本城へ出立せん。正に残しける。